第３部パネル　分科会 32　継続／大阪18／神奈川17

子どもと高齢者の交流や助け合いをどう広げるか

（企画・協力：にっぽん子ども・子育て応援団）

提言

子どもはまちの未来。
コミュニティの共感の根っこに
子どもたちを！

登壇者

【進行役】
奥山　千鶴子氏　（特非）子育てひろば全国連絡協議会理事長
松田　妙子氏　（特非）せたがや子育てネット代表理事
田中　博子氏　（特非）ゆうゆうクラブ理事長
井出崎　小百合氏　（特非）もりのこえん代表理事

■ **寄せられた声から**

- ヒントがいっぱい見つかりました。本がつくれちゃいそうです。「こどもまんなか」にすると、地域の合意が得られやすいとしみじみ思います。
- 子どもを真ん中に、まちで人がつながって、子どもも大人もジジババも真剣に遊べたら楽しいだろうなー。ママが一人の私に戻れたり、年の離れた友だちができたり、まちのだれかのやってみたいを応援できたり。いろんな人が、ただそこにいっしょにいられる仕掛けを考えながら、課題からではなく、楽しめること、夢中になれることを、小さくてもやってみたいです。
- 「子どもがいるだけで大人たちが集まり、子どもは宝物だと子ども自身が感じられる地域社会が大切」に共感できました。
- 子どもと高齢者の交流をしようと考えるのではなく、楽しいことを地域でする、そこにはいろんな人が参加してくるとの言葉が心に残った。

議事要旨　奥山 千鶴子氏

神奈川大会での全体シンポジウムで山極壽一氏が「ヒトは、進化において集団で子どもを育てる、共に食するということで共同体による共感力を身につけてきた」との見解にこれからの新たな共同体のあり方のヒントを見出したいと思い、本分科会は、大阪大会、神奈川大会からの継続したテーマである「子どもと高齢者の交流や助け合いをどう広げるか」に視点を置き、子どもが親だけでなく、地域の人たちに育まれて育つ環境づくりが、双方に与える影響、これからの社会づくりに活かされる可能性について、それぞれの現場の実践からジャンプする未来に向けて話し合った。

現代の子育て家庭は、子どもが生まれることをきっかけに子育てしやすい環境を目指して引っ越すことも多い。そこで今回は、新参者である子育て家庭をどう地域が包摂していくのか、少子化で子ども同士が関わりあったり、おもいっきり遊ぶ環境が失われつつあるなかで、子どもと高齢者・地域との仲立ちをしている団体の実践から学んだ。

ＮＰＯ法人もりのこえんの井出崎さんは、山口市内23世帯50人という超高齢化が進む集落で、素敵な大家さんとの出会いから空き家を提供してもらい、森のようちえんを運営している。地域の行事もなくなるなか、森のようちえんの日々の活動や行事には地域から差し入れがされ笑顔がたえない。自然豊かな環境での暮らしが、親にも周りにも「年を重ねた人を尊重し、小さい子どもを慈しむ」といったことを自然に伝えてくれていると実感しているそうだ。

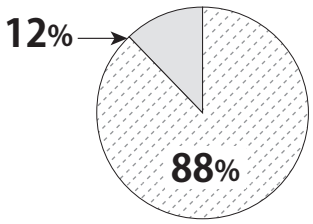
一方、人口90万以上の東京都世田谷区の子育ての現状を語ってくれたＮＰＯ法人せたがや子育てネットの松田さんからは、ＵＲ団地の独立した親子の交流の場を通して、団地で立ち話できる関係性を増やすといった理念のもと、自治体と子育て家庭をつなぐ防災訓練の実施や、包丁とぎ、おもちゃの修理といった地域の年配者の技術を活用したり、コロナ下のフードパントリーの活動紹介があった。都会であっても人とのつながりづくりは日常から、あとは関心ある人のネットワークを顔つなぎで広げていくことが大事とのこと。

香川県高松市で、子育て親子の交流の場と、高齢者の交流の場の両方を手掛けているＮＰＯ法人ゆうゆうクラブの田中さんからは、大家さんとの出会い、遺志を紡いでの居場所運営について、隣接する活用されていなかった公園でのお花見、グランドゴルフ、ラジオ体操など多世代をつなぐ活動の展開、コロナ下でさらに顕在化した家庭への支援としてこども食堂、フードバンク・フードパントリー、制服のリユース等の活動が紹介された。

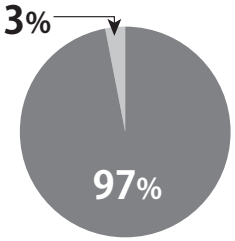
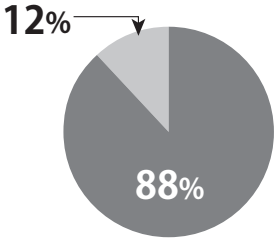
３人共に最初は子育て支援から取り組み始めたが、子どもが育つには多世代の関わりが必要不可欠だと自然に周りを巻き込む力を育ててきたことがわかる。地域と上手くやるコツは、①地域のひとが大切にしてきたことを大切にする、②まちの行事を一緒にたのしむ、③日々のくらし・つながりを大切にする、といった原点。そのようななかで、地域に子どもがいるということで笑顔が広がったり、軋轢をのりこえた相互理解、支え合いがひろがったりしている。しかしそこには、しっかりつなぎ役としての「地域プレーヤー」が存在する。そして何よりも、子どもは大人のふるまいをしっかり見て感じ取っていることを忘れてはいけない。制度的には高齢者支援、障害者支援に後れをとっている子ども・子育て支援分野が、ジャンプした先の着地点を地域にどう見出すのか、こども家庭庁の発足とともに当事者として関わり続けなくてはならない。もちろん、未来を担う子どもたちもまた当事者の一員である。

アンケートの結果　参加者概数：338名　回答者数：144名

回答者の所属先



助け合い活動をすすめる立場の方



その他の方